

【報告 4】

大学における障害学生支援の本来的役割と展望 —「学習者を中心とする教育」の視点から—

中村 正

(立命館大学障害学生支援室室長・産業社会学部教授)

1. はじめに

皆さんどうもこんにちは。中村と申します。

お手元に配付させてもらっております、立命館におけるサービスラーニングの新たな展開と書いたものがございますので、それに基づきながら話をさせていただきます。このA4、3枚ぐらいに渡っているものですが、もしテキストで御入り用の方は言ってください。電子メールで、テキストベースのものを送りさせていただきます。後でお読みいただけるようにしたいなと思います。

二階堂さんが話をされた障害学生支援室の取り組みと、それから吉岡さんが話してくれた分は研究し支援の取り組みを記述して連動していくそんな立命館大学、さらに高畑さんの関西学院大学の取り組み大変参考に聞かせてもらいました。それから、倉本さんの総括的なお話からも、特に、学習を向上させていく視点からの障害学生支援が、大学の中で重要視されてきていることなど、いろいろ聞きながら感じたことを次の討論の呼び水になるような形で話ができればいいと思っています。まとめとか総括とかいう意味ではありませんので、呼び水だと思って話を聞いてください。

障害学生支援室での取り組みは、今、紹介があったように、いろんな制度的な課題は残しつつも、障害のある学生の学習を深めていくために粛々と取り組んでいきたいと思っているのです。吉岡さんが言ったように、大学全体

や社会全体にこういう発信やその場面を少し紹介していきたいと思います。

2. 授業実践の意味を問う：ある障害学生との関わりから

その前に、私も障害のある学生と出会って、いろんなことを授業の実践という意味において考えることが多くありました。2001年ぐらいだったでしょうか。視覚に障害のある学生が、私の授業を受講していました。日々の授業の中で、いろんなことを感じました。特に彼の学習に対する姿勢は真剣で、一教師としても問い詰められたわけです。そのような状況に直面し、いいかげんな授業をしない、というそんなの当たり前のことを感じたのです。

例えば、どんなふうに授業の予習を行ったかという、私が、1週間前には次の講義で話をする内容を電子メールで彼に送りました。A4の2枚程度でしょうか。その日の獲得目標、使う言葉やそれがどんな意味なのか、また、授業は大体90分ですので、どのように展開されるのかという授業の構成についてお知らせしました。導入があり、課題のページがあり、それから本論の展開があって…といったように、授業の構成について、できるかぎり1週間前に届けるようにしました。

そうすると、今まで随分あいまいにしていたことが浮かび上がってきました。あいまいというのは、こういうことです。基本的に授業はあまり構造化せずに、その場の学生たちの反応を見ながら進めます。すると、なかなか予定どおりにいかないこともあるわけですが、そういうやりとりをするようになってから、やはりこれは1度、授業を体系的に構造化しなければならないと思いました。

4、5回の授業を通じて、障害教育の専門分野について、体系的に教える努力をすることになりました。もちろん、1週間前には準備できなくて、2日前になって、おわび状と一緒に送ったりしたこともあります。そんなやりとりをしたものですから、その年の授業は、私にとってとても印象深いものでした。

結果として、彼は一生懸命、私の話をパソコンにノートとして打ち込んで

いくわけです。そこで、そのノートを見せてほしいといいました。私がどんな授業をしたのかを後で知りたかったので、時々見せてもらおうと、余り大した話をしてないなと思うこともありました。もうちょっとこの辺をこうしたらよかったと、ここはこうしたらよかったと、いろいろと思い出しました。そんな自分なりの反省をしながら、これは貴重なノートなので、試験の前に売ったら、みんなの役立つんじゃないか、そのときの著作権は私にあるから、などと冗談を話したりして、とても印象に残っています。その後、彼は修士まで来てくれて、論文を書いてくれました。今の時代は、教師のFDということが盛んに言われ、さきほども高畑先生が言われていました。私は、その授業を通して、障害学生支援は本当にインパクトのあるFDの取り組みだなと思わせられた経験でした。

3. Teacher-centered から Learner-centered へ

そこで考えたことは、大学の先生たちは、ここ最近ですけれども、パワーポイントを使って説明する授業が多くなってきています。ビデオも大変よく使います。それで、配付資料もレジュメと一緒に、学生の便宜を図るために配付しますよね。多様に取り組むのはいいのですが、私がふと疑問に思ったのは、これは学習者の視点に立っているのだろうかという疑問です。

教師はとすると、教師中心の授業を組み立てがちなのではないかと個人的な経験もあり、思いました。たとえば、1つだけ紹介しますと、パワーポイントをたくさん使うようになりました。ところが、このパワーポイントの文字が小さすぎるのです。要するに、画面で見えないのです。そうすると、大学のプレゼンで使う場合に、どのくらいの大きさの文字がよいのか、これは、やはり学習している側から見たことがないとわからないのです。そもそも、大学の教師たちは情報量が過多になります。ですので、文字を大きくすればするほど、情報量が減りますよね。だからといって枚数を増やすわけにはいきません。その塩梅をどうしたらいいのかということを、やはりフィードバックしてもらいたいのです。

それともう一つ、教育顧問の人と話をよくわかったことは、ビデオは見せても役に立たないことが多いということです。視聴覚教室だから、導入すればいいというわけではない。これは、どういうことかと思って学生に聞いてみると、最初から最後まで視聴覚教材を見ていると飽きてしまう。やはり、何分テープを流して解説するかを私的な作業の中で文脈化していくということが大事です。ただ見せるだけでは効果がない。

本当は、吉岡さんが仰っていたようにデータを取り、どのようなタイミングで、どのような内容のものを、何分くらい見せたらいいかを学習者の視点から見る必要があります。教師は勝手な思いがありますから、ある文脈をもって知識をつくっていますので、その中で、これでよかろうと思っていても必ずしも学習者の視点で見ますと、そうなっていない人多そうということになるのです。

そこで、それに関連することがいろいろ出てまいります。必ず授業の最後は、まとめなければならない。私も関西人ですから、落ちをつけなきゃならない。今日のまとめは何であるか、やはり議論の組み立て方ということを非常に意識するようになりました。学習者の視点に立った教育ということが、私なりに大きなテーマになってきたのも、この視覚に障害がある学生との出会いからです。学習者の視点に立ったら、私の授業はどのように見えてくれるのかということを、彼のノートや、やりとりや、いろんなことを通じて学ぼうと思いました。それは多分、どの授業にも言えるのではないかと思います。

そうすると大学の授業が、結果としては教師中心になっている様子がよく見えてきます。英語でいうと、teacher-centered educationになってしまっているわけです。先生が中心になり、先生が学んでほしいことが前提にあって、それを学生たちがどんどん吸収していただくだけになってしまう。わからないなりに学生が発言することなく、知識の提供にエネルギーをつぎ込んでいく、そういう教師中心の授業から、学習者が中心となる授業へとどう切り替えていけるかということが重要になるわけです。学習者中心、learner-centered educationということですね。大学教授の意識がどう変わっていく

かということです。

ということで見てみると、学生たちも学習者になってもらう必要があります。学習というのはどのように進化していくのだろうか、理学の分野、工学の分野、経済学の分野、それぞれ知的発達の進化の具合が違いますので、それらがどのように組み込まれていくのか、それを踏まえ1回生のとき、2, 3, 4回生それぞれ何をすべきなのかということです。ここでは、1つ1つの授業だけではなくて、大学全体のカリキュラムが構造化されていないと難しいだろうということです。いくら一人の先生が頑張ってもそれぞれに構造化しても、カリキュラムがバラバラだと、それはそれでまたよくないですね。だから、多層的にその後広がっていくという意味で、今、学習者を中心とした教育に向けた取り組みを進めようとしています。

そうすると、何をしなければならないかという、吉岡さんの言われている大学や社会へ広まっていく矢印です。あれに重ねて、さらに二階堂さんが言われていた、コーディネーションの相対的な機能であるプロフェッショナルな専門性、それから高畑先生が言われた、倫理や正しいことの追求につながりたいと考えます。それが多分、倉本さんの言われている学習のめぐる三つの障壁の改善につながっていくだろうと思っています。

立命館大学では、お手元の資料にも書いたことですが、ボランティアセンターを設置し、そこでいろんな地域に活動を持っています。これが大事な取り組みなので、たとえ有償の活動であっても、それこそ連携というのは大事なだと思いますが、ボランティアということになるとなおさらです。ボランティアセンターはどこにでもあります。どこにでもというの大げさですが、地域の中にニーズがあって、それが活動をしています。しかし大学の中なので、大学教育に連動したボランティアセンターというのは、あり得るのではないかなと考えているわけであります。

4. サービスラーニングの構築

それで私がアメリカで出会った言葉が、「サービスラーニング」です。サ

ービスラーニングというのは、コミュニティの中の課題をサービスとして顕在化し、それに対して教育という営みを通じ、関係者を巻き込んでいく取り組みです。この場合は、広い意味でのサービスということです。

障害支援というサービスが成り立ち、そこに関わる学生たちが、もちろんボランティアとして「自発的に行う」ということに注目しつつ、かなりそれは教育効果を持ちますので、そこに組織立った取り組みとして光を当てていきます。それをラーニング、学ぶということに重きをおいて取り組んでいます。

そうすると、先ほど言ったさぼーとnetに関わっている学生たちが私のゼミに何人かいて、やはりさぼーとnetでの活動をゼミの活動団体に選んでいるわけです。とても大事な営みでした。そして、それが自分の職業選択に大いに影響を与えていると思います。決して、福祉の分野だけではありません。企業も含め、就職試験をへて、いろんなタイプの仕事をたくさん探してきました。関連する分野の仕事について興味を持ち、同時にさぼーとnetで活動しながら、さらにゼミでこのことを私的に検証しつつ、またさらに自分のキャリア形成にもつなげていくという、好循環があります。

こういったものを1セットにして、サービスラーニングと呼びます。こういうことは、キャンパスという一つのコミュニティの中で、障害学生支援ということから始まってはいますが、色々なインパクトを与える最初の第1歩になっているのです。これをもっと総体的に取り組むことで、ボランティアセンターだけではない大学らしい取り組みができないかと思っています。この4月から、ボランティアセンターを改め、サービスラーニングセンターにしていきます。それができると各学部の専門とかかわり総体的な体系が構築できないかと考えています。

特に、エンジニアリング、工学系の場合には、福祉工学などの学問とボランティア教育の体系が一体的になればと考えています。それはもう障害者支援のみならずいろんな分野に言えることです。とりわけ、大学を大いに巻き込みたい。さらに時代を超えて地域に出ていくことができますし、それは必要なことです。特に障害のある学生たちの就労支援というのは大きなテーマ

です。働く場の確保ということが、これも大事だと思います。大学の中で、キャリア教育に関するノウハウは随分できてきていますが、障害がある学生たちのキャリア開発というのは、まだ準備できていません。自分のところでできてない、社会にもまだない、仕事として重要な仕事にセットされているわけではありません。ということは、開発していくしかないと思うのです。

ですが、いきなり仕事に就けませんので、ジョブコーチという取り組みとできないかなとも思っています。そうするとコーチする学生の仕事が増えていくという循環が生み出される、これは地域の中でしかできないと思います。大学は人材養成機関としてジョブコーチというシステムを作っていくこともそうですが、本来的には人材を養成するということが求められます。これもサービ斯拉ーニングによって仕掛けを用意することで、可能になると思います。

しかし、企業はこういうものを作り出すということをなかなか積極的にやりたがない。経営的に採算がとれないと考えてしまう。こういう状況も、大学で生み出したジョブコーチの制度を使いながら、就労開発の場面に学生を参加させることで、企業も進展させていくことができるのではないかなと思います。

5. 最後に

私は、人間科学研究所の所長の望月さんと、10何年間もここで一緒に仕事をしていまして、その取り組みが始まっています。さらに障害ということだけじゃなくて、ひきこもりとか、いろんなタイプの場面を設定しながら進んでいる動きが見られています。こうした動きをぜひ積極的にやっていきたい。これは、大学、社会が繋がっていくということです。学習者の視点に立ち、最終的には当事者に視点を移した、当事者を中心にしたサポートというものもあります。日本のコミュニティや社会が波風立てて変化していく、ラーナー・センタードのアプローチによるサポート、そういうのもあり得るかなと思っています。そんなことをさっきのお三方の話を聞きながら思った次第で

す。

大学において何ができるか。それぞれが研究者であると、冒頭所長が、今回のシンポジウムのサブテーマに込めた意味を話されました。それぞれが考えるようにという宿題だったので、私なりに、みんなが研究者であるということの意味を考えました。私は、フィールドスタディ、アクションリサーチということの日々うたっていますが、そうした手法も一緒に含め、報告者発、あるいはそれぞれが研究者という視点に立ちますと、みなさんと同心円上でつながっているということを感じた次第です。それぞれが研究者であるということがどういう意味なのか、いろいろ考えさせられる所長からの課題です。残りの時間で、ぜひ、いろいろと考えられたらと思い、そのための呼び水の話とさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございます。

(なかむら ただし)

SPECIAL FEATURE

特集

輝く学生—学習者を中心となる教育を進める立命館へ—

立命館におけるサービス・ラーニング (service learning)の新たな展開



常務理事(教学担当)、立命館大学学部長

なかむら
まさひろ
中村 正

学習者を中心となる教育

社会と連携し、地域に貢献する実践を基軸とした学びの体系化は、学問を社会的現実と有機的に関わらせることや「地球市民の養成」の重要な手がかりとなる教育の方向性である。自然科学、人文科学、社会科学のあらゆる知的営為は、社会に係留され、社会を先導し、社会を批判する過程において創造性を高めるといえるだろう。学びの動的な過程を象徴するものとして、インターンシップやコーオペ教育、さらに、教育・福祉・医療・臨床の諸学における実習科目、法務実習、国際実務、政策系プロジェクト等、実に多様にカリキュラム開発されてきた。それらはpractice-based educationとしての効果も確かめられ、各学部のカリキュラムにおいて一定の地歩を得つつある。ケースメソッド、フィールドスタディ、ケーススタディ、プラクティカム、事例研究法、アクションリサーチ等のように教育方法としても精緻化されている。当然、それらを支える研究も活発に展開されている。さらに、カリキュラム開発はFD実践としても価値あるものである。

そうした学びのスタイルをさらにボランティアな行動領域において展開するために、社会の解決すべき課題をニーズとして顕現させ、サービスとして編み上げ、人材育成と学習課題を結びつける教育方法としてサービス・ラーニングがある。こうした教育は、学習者に視点を置き、講義などで得た知識としての学習の成果を社会的現実において検証し、それを生きた知識へと転換させる取り組みであり、「学習者を中心となる教育」の典型として機能する。

立命館大学における経過—ボランティアセンターの実践との関わりで

学生の自主活動はボランティア領域をカバーしてきた長い歴史があるが、さらに大きな関心をもたらした画期は阪神淡路大震災である。社会的にも、ボランティア、NPO、NGO、非営利セクターなどの言葉とともにある領域が拓かれた。私も大学コンソーシアム京都を舞台にしてNPO・NGOでインターンシップを実施し、コーオペ演習において学習を深める通称「NPOスクール」を運営していたことがある(1998年度から2002年度まで)。また、産業社会学部において京都市社会福祉協議会等との産官学連携による「ボランティアコーディネーター養成講座」も始まり、学外からの資金援助を受けながら拡充してきた。2004年度には単位認定を伴う教育プログラムを実施するために、全学にむけてサービスを提供する立命館大学ボランティアセンターを設置した。さらに、2005年度には「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」が、文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)に採択され、ボランティア教育の体系的整備が急速に進展した。センターは、台風23号災害被災地支援活動、里山保全ボランティア、村おこし笹刈りボランティア、環境保全ボランティア、文化ボランティア、子育て支援ボランティア、チャレンジショップ・プロジェクト等に取り組んでいる。今後は、「ボランティアコーディネーター養成プログラム」をサービス・ラーニングとして強化・発展させること、地域活性化ボランティアプログラムの第三段階を具現する取り組みを開発することが課題となっている。また、2008年度からの教養教育改革で議論されている「教養ゼミナール」の中に、地域活性化ボランティアを組み込むことも検討を進めている。

る。

さらに、学生相互の学び合いの仕組みとして、オリター・エンター、プレズメントリーダー、ジュニアアドバイザー等のピアエデュケーションという取り組みが存在し、キャンパス内での学生の自主的な活動として発展してきた。ピアエデュケーションは、上回生が低回生の学生を指導・援助することを通じて、相互に学び高め合う取り組みとして発展してきたが、大学教育のユニバーサル化の中でその重要性が増している。さらにそれを担う学生の力量向上がますます求められるようになっていく。ピアエデュケーションにも理論と実践があり、それを体系的に教授し、実践を担う学生がピアエデュケーターとして成長する制度として、2004年度に正課授業を支援するES（教育サポーター）制度を発足させた。

ボランティアセンターではサービス・ラーニング研究会も開催しており、実践報告やシンポジウム等、高等教育研究とボランティア・サービス・ラーニングの視点から研究が進められている。

「学びのコミュニティ」形成とサービス・ラーニング

ピアエデュケーションは、サービス・ラーニングの概念である「地域・コミュニティ」を「キャンパス＝大学」と置き換えたものである。「大学」と「学生」の双方の利益に、そして「活動」と「学習（学び）」の双方の行為に重きを置く取り組みであるといえることから、キャンパスをもサービスの対象として組み込み、広い意味での学びのコミュニティを活性化させるものとして位置づけることができる。さらに、障害学生支援（ノートテイクなどの情報保障活動など）、国際学生との学生交流、附属学校での教育補助や学校ボランティア、平和ミュージアムでの諸活動等、学びのコミュニティとしての大学において生成するサービス・ラーニングは多種多様にあることがわかる。

したがって今後は、特殊な教育の方法としてサービス・ラーニングを位置づけるのではなく、ユニバーサルなアプローチとしても位置づける必要があると考える。つまり、大学のもつ人材育成機能と学術研究機能を統合し、あらゆる地域の課題をサービスとして組み立て、現代的課題にそくして地域社会と連携すること、つまり人

材育成の「社会実験的シミュレーション」をおこなう営為としてサービス・ラーニングを位置づけるということである。地域の課題を学生が実践するサービスとしてプログラム化することとは相当な練り上げが必要となる。研究課題、理論と仮説の検証が可能となるように大学の側では位置づけ、それを実践することで実際の社会へと定着させていくシミュレーションとなるようにプログラムをデザインするということである。その主題は実に多様にある。たとえば、環境問題、食の安全の確保、企業の社会的責任、法化社会の現実、グローバリゼーション社会、生命をめぐる倫理と社会のあり方、技術のもつ社会性等、あらゆる学問領域においてユニバーサルな教育方法としてサービス・ラーニングが開発される必要があるだろう。その「社会実験的なシミュレーション」の題材にも事欠かない。たとえば、障害児者のICTを介した新しい関係構築の可能性、学内外の情報バリアフリーを目指したサービス情報ネットワーク（情報弱者のための専門用語データベースの作成、ノートテイクや手話通訳者のための情報交換システム）、大学業務や生協等と連携した学生ジョブコーチングモデルの研究、若者としての大学生を対象にしたキャリア形成やユースサービス開発、環境教育のコンテンツ開発等が想定できる。市民社会の担い手として各分野に専門的な力量をもった学生を輩出するために不可欠な取り組みとしてプログラム開発が期待される場所である。

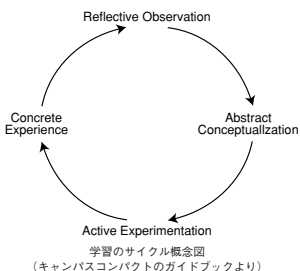
こうして、社会連携・地域貢献そして人材育成と学術研究が連動的に好循環する触媒の役割をサービス・ラーニングが担う。さらに、そのサービスを地域と協働して開発し、そこに研究機関が関与し、人材育成機能を組み込むことは、「実践の科学化」ともなる。労働集約性を知識集約性へと高度化することが大学をおして可能となる。

世界の動き—地球市民の育成をめざして—

たとえば、カリフォルニア州立大学バークレー校では、サービス・ラーニング（academic service-learning）に関わる150のプログラムがあり、それは45の学科に広がっているという。また、ミシガン州立大学では、あらゆる領域においてプログラムがある。芸術文化学では、刑

務所での創造芸術プログラム、貧しい地域での識字実践、コミュニティ芸術、文化遺産保護ボランティア、スペイン語圏企業のインターンシッププログラム開発、子どもと少年センターでの教育実践、公衆衛生学では地域におけるエイズ予防の地域活動プロジェクト。理工系学部では、入学前理数系教育補助プロジェクト、BioKIDS（理系キッズ養成）プログラム、工学を地域創造に役立てるプログラム、法科大学院では家庭内暴力地域連携事業等である。米国の各大学の教育開発という部署にはサービス・ラーニング部門が置かれており、プログラム開発に熱心である。

さらに、「キャンパス・コンパクト」という大学連合組織があり、サービス・ラーニングに関する活動の拠点となっている（<http://www.compact.org/>）。1985年にジョージタウン大学、スタンフォード大学、ブラウン大学の学長の発意で組織されたものであり、現在は、全米950以上の学校が加わる大連合となり、約500万人の学生が所属し、実践をするまでになっている。サービス・ラーニングの理念は次の五つにあると宣言する。①サービス・ラーニングは、学生の参加と参画の学びであること。②学生のボランティアズムをととして、社会問題の解決に貢献する学習としてプログラムが組まれていること。③学生を市民として成長させることに責任を持つためのプログラムであること。④大学とコミュニティの生産的な協働を重視し、民主主義的な参画が目標とされていること。⑤市民社会の形成に教育を役立てること。⑥地域社会への大学の責任を果たすこと。



サービス・ラーニングの取り組みにおける学習は、「反省的な観察→抽象的な概念化→行動的な実験→具体的な経験」のループを描く「サイクル」として説明する

ことができる。その際に、サービスとしてコミュニティのニーズを顕在化させるという点が鍵となる。そのニーズを充足させる実践を体系化し、教育的効果のあるプログラムとして編成し、こうした学習のサイクルを作動させるためのマネジメント組織が不可欠となる。初年次教育、基礎演習、言語科目、専門科目、実験・演習、卒業研究でわかりやすく構成されるカリキュラムツリーにおいて固有な役割を發揮するであろうサービス・ラーニングを組み込むことで、カリキュラムは学習者を中心とした実践的な過程を含むことになる。

また、ここでの学習は、「経験的学習」を意味する。社会の課題に応えるために、活動的で、知識の応用可能性が問われ、市民社会の一員としての主体的意識が涵養されるという点では、学習者を中心となる教育そのものである。学生が自らイニシアティブや責任をとり、意思決定を行わざるをえない機会となるからである。地域社会の必要性に根ざしてサービスが生成しているの、大学が社会の期待に応えるという点では、開かれた大学づくりともなる。

今後のために

ますます大学の国際化が進展するだろう。カリキュラムの国際標準という視点も必要となる。単位構造、学習時間、成績評価の諸基準も同様に変化していくだろう。その際に、サービス・ラーニングという教育手法も同様に取り入れていく必要がある。しかし、あくまでも「Ritsumeikan Way=立命館大学メソッド」としての理念がないと個性的なプログラムとはならない。自由と清新、平和と民主主義の理念を体現したサービス・ラーニングのプログラムにしていきたいと思う。私は、サービス・ラーニングの根っこにあるボランティアズムをわかりやすく言えば、「ほっとけない」という価値だと思っている。「もったいない」という価値とともに普及させたいと思っている。これは一つのアイディアにすぎないが、学習者からみてわかりやすい目標の提示とプログラムの充実、そしてサービス・ラーニングをすすめる拠点の形成を目指したい。

(産業社会学部・応用人間科学研究科教授／社会病理学・社会臨床学)

【司会 吉岡】

中村先生、どうもありがとうございました。では、これまでの報告をふまえて、質疑応答に移らせていただきたいと思います。

◇質疑応答

【司会 吉岡】

ではこれから、質疑応答を始めたいと思います。休憩時間にお書きいただいた質問について、倉本先生から発表順に、ご質問に回答をしていただきたいと思います。ではまず、倉本先生、よろしくお願いいたします。

【倉本】

それでは、いただいた質問から「たしか福島智さんだったと思うが、このようなことを言われていた。『障害者自立支援法に関して、障害者は生まれつきや、自分ではどうしようもない理由で障害者になっているのに、なぜ余分にお金を払わなければサービスを受けられないのか。『無実の罪で収監された刑務所からの保釈金の徴収に等しい。保険金を払わなければ、必要なサービスさえ受けられないという状況がある。』これに対し、真っ当な当たり前の生活が送れるということ人を人権保障だと考えると、障害学生支援とは、どういうレベルの教育を生むことになるのか、そして、その教育を保障するのは、誰か？たとえば、学校の先生なのか、それとも学校自体なのか。』

このご質問なんですけども、1点目については、福島さんがそういったことを書かれていたのをどこかで読んだ気はするのですが、どういう文脈で書かれたことだったか今ちょっと思い出せません。いいかげんな話をしても仕方がないと思うので、こちらは申しわけないですけど、保留ということで置かせていただきます。

2点目の質問ですね。その責任を負うのは一体だれなのかという話なんですけども、先ほど私がお話させていただいた中にも、ちょっとだけ出てきたんですけれども、たとえば、学生さんに、講義の手話通訳を保証していくというのを一つの具体例として考えたときに、これを保証する主体というのは、とりあえず大学であるというふうな形で言えるとは思いますが、ただこれ、もうちょっと突っ込んで考えていくと、どんなに大学が手話通訳を保証しようとしたところで、ちゃんとした技能を持った通訳者を必要な数だけ提

供する、そういう仕組みが学外に存在しなければ無理ですよ。それを大学がすべて自前で調達するというのは、現実的に不可能だと思いますし、あまり効率的でもないように思います。

ですから基本的に、障害学生支援の責任を負う主体は大学であるわけですが、大学自体も社会全体の中でいろんな制約下であり、その前提の中で行うわけですから、外部の環境をどう整えていくかということを同時に考えていかないと、解決可能な問題というのは、限られてきてしまうと思います。

【司会 吉岡】

倉本先生、ありがとうございました。では、次に高畑先生から、質問へのご回答をお願いいたします。

【高畑】

コメントや質問がいくつか寄せられましたが、まず「聴覚に障害がある学生さんが、授業中にみずから発言することが少ない。それだけではなく、レポートの発表の際に、先生に聴覚障害の学生の発表を飛ばされてしまったということさえあった」という主旨のコメントがありました。

他の先生方の授業を傍聴して、聴覚に障害がある方がどのように授業をポートをつけたても、その人たちの発言の機会を保障するものではないことに気付きます。ですから、今のような話を聞くと、そうした社会的状況で、ひょっとしたらその方ご自身もそうした対応が当たり前と思いきまされているのではないかと、私自身はちょっといたたまれない気になります。ただし、大学というところは、教授法を個々の先生にまかしているところが大きい（その良さもあれば、まずいこともある）。いずれは、このようなことをんどの先生方にきちんと理解していただきたいと思ってるということで、今日はとどめさせていただきたい。

次は「利用している学生さんとスタッフの関係について、とくに学生スタッフが経験を通じてどんなことに気づいていくのか？」それは、もう本当に多々あります。要するに、それまで考えもしなかった。目が見え、耳が

聞こえる人間にとって当然のことが、通用しないことに気付く（これこそ、人類学の基本です＝自分と異なる人に出会うことで、自分自身の気付かなかった面に気付く）。一つだけ紹介しますと、点訳をしているのですが、そのスタッフの方が気づくのです。授業で、先生が「レジュメの何ページをめくってください」と言うと、健常者には問題ないのですが、点字はスペースが大きいので枚数が多くなり、先生が言ったページが点訳資料では何頁になるのか、とっさにわからないわけです。それで立ち往生してしまったのを、点字を打っている時ではなくて、一緒に授業を受けている時に、利用学生が戸惑っているのを見て初めて気がついたのです。自分が思っても見なかったところで、思わぬ落とし穴があり、かつ、それに気付けば改善できるのだ、ということに気付く。この“気づき”が大切だと思います。実は、今、我々の活動について本を作っています。その中には、利用学生の方が1名、スタッフが4名、コラムとして書いていただき、そこに今言ったことも書かれています。もし、ご興味があれば、3月中旬ぐらいに公刊予定なので、お読みいただければと思います。

さらに、もう一つだけ付け加えると、障害がある学生が他の障がい学生のサポートをしている例もあります。例えば、聴覚障害の方が視覚障がい者のために点訳サポートをしていました。私自身、そんなことを最初考えてもいなかったのですが、学生自身は、いろいろな形で経験を積んで、様々に気づいていく。逆に言えば、そうした“気づき”を取り上げることができなかったら、教員として恥ずかしいとも思います。

次の質問で、「手書きサポートに関して、どうしてそんな発想が生まれたんでしょうか？」とお尋ねなのですが、やはり“現場”で第三者的な目で「何に困っているのか？」を見るということが大事かと思います。ただし、実際に他の先生の授業で観察しているのは、私自身も気がひけるし、講義をされている先生もなかなか話づらい雰囲気で、難しいところもあります。しかし、教育現場で観察してこそ、初めて気がついていくものでしょう。

次に、「発達障害の学生についてどう対処しているか？」というご質問がありました。これは一言では言えません。発達障害でも、うつ病でも、個人々々

によって症状が様々です。一対一で教えたこともあります。時々、半分カウンセリングしながらの授業とでもいうべきものになったりもします。関西学院でも発達障害や学習障害への対応は、制度的には確立しているわけではなく、手探りの状態です。

最後に、「文科省に対してどのような要求をしたいか？」というご質問がありました。やはり補助金とその扱いですね。障がい学生への支援というきちんとした目的をもった経費であることをきっちり指導されること。さらには、大学の外部評価の一つの基準にしていくべきではないのか。個人的にはそう思います。

最後に私の方から、もう一つだけ言い添えます。私の場合、自分の授業のFDは確実に向上したいと思います。聴覚に障害がある方のため、まず、資料を全部パワーポイント化した。また、そうした資料を学生に公開するようになった。障害がある方だけではなく、日本語が不自由な留学生の方などにもわかりやすくなったと思います。また、手前味噌になってしまいますが、ビデオに字幕付けをおこなうと、ただビデオを流すよりも、一般の学生にとっても、内容が掴みやすくなっているのではないかと思います。長くなりましたが、以上です。

【司会 吉岡】

ありがとうございます。では次は、私にいただいたご質問を読ませていただきます。いくつかいただいたので、その一つを選んでお答えしたいと思います。ご質問の内容は、「記述・記録から、了解性、有効性をみるのは不十分ではないかと。なぜ、そのような記述になったのか。とりわけ、当事者の背景について、どう考慮しているのか」というものです。

先ほど紹介した研究をやったときには、まず、今、この聴覚障害学生が出ている講義場面で、問題をどういうふうに解決するかというところからスタートをしました。当事者の背景を知ってからやるということではなくて、まず今の問題解決をするために、何ができるだろうか？ 具体的に何ができるだろうか？ というところから、スタートするという方向性が一つあるので

はないかと思っています。

そして、なぜ、そのような記述になったのか？ ということは考えていかなければいけないことだとは思いますが、実践をやっていたとき、もともとの状態として、支援に対して、対象となった学生はほとんど要望というものを言うことがありませんでした。ところが、支援をして、コミュニケーションシートに毎回自分の意見を書いて、ノートテイクとやりとりをする、先生とやりとりをするということを何回か繰り返した結果、このようなことが起こりました。研究が終わった後に、その学生が初めて事務のほうに直接、「私は、本当は聞きたいんだけど、聞けないんだ（さぼっていて聞けないわけではないんだ）」ということを発信したという変化があったんですね。つまり、変化があったことで、要望を言えないわけではなくて、発言したくても、周りがそういう機会をちゃんと提供ができてなかったんだなというふうに背景がわかったのです。まず背景を知ってから、支援をするというのではなくて、やっていく中で、その人の背景が分かったり、変化したということでもって、背景を知るといって、そういうアプローチの仕方もあるのではないかと思います。ご質問をいただいた方には、ちゃんとした答えになっているか分かりませんが、回答は以上です。次は二階堂さん、お願いいたします。

【二階堂】

いただいた質問は、「ノートテイクのようなサービスを有償でしているのか、無償にしているのか」ということです。ここは、今日の発表では、余り十分に説明できなかった部分でもあったのですが、障害学生支援室では、どんなサービスをしているのかということにかかわります。

本学では、正課の授業にかかわる支援は、ノートテイクにかかわらずすべて有償で行っています。安定的に、そして利用する学生さんが変な気遣いをせずに、ある程度、線を引いた関係でサポートをお願いし、お願いされるという関係を築けるという面でも、有償ということになっています。

金額は時給800円なのですが、この妥当性はちょっとわかりません。ただ大学で、学部生がアルバイトをした場合にはすべて時給800円と決まってる

ので、その枠がそのまま適用されているという形になっています。以上です。

【司会 吉岡】

では、まだお答えになっていない質問がありましたら、先生方、回答をお願いいたします。ございませんでしょうか。では、時間がもう少しありますので、さっきお答えできなかったご質問に残る時間で、まだお答えしていない質問に答えようと思います。

【吉岡】

もう一ついただいたのは、「コミュニケーションシートを記入するには、時間と労力が必要なことも事実です。ノートテイクさんを見ていると忙しそうで、シートへ記入というのは権利ではあって義務ではないのではないか。書きたいと思ったときだけ書いて、全く書かなくてもよいのではないか。その点について、吉岡さんはどうお考えですか。」というご質問でした。

確かに、そのとおりだと思います。これはシートを作る際に、極力、ノートテイクやろう学生の負担を減らすということを最優先にして、実験者である私がやりとりの仲介をするということをしました。手で書いてもらうのは負担だと思ったので、講義後にメールでシートを送って、それに記入していただいて、2日以内に返送してもらうというような手順とりました。その実験が終わった後に、どのくらいシートに記入することが負担でしたかという質問をしました。5段階評価でたずねたところ、そこでは5か4の評価、つまり負担ではなかったという評価が出ていました。このことから、実験においては負担ではなかったと思われます。ただ、あれは2つの講義だけだったので、全部の講義でシートを書くとなると絶対に負担になると思いますので、この点をクリアするサービスの仕組みというか、支援の方法というものがよいのかを考えていくのは、今後の課題だと思います。

3つ目の質問は、私と二階堂さんにいただいた質問なのですが、「障害学生支援の中で、一大学としてしなければならないこと、及び、他大学と連携して実現できること、並びに地域とのかかわりの中で解決を図るべきことは

あるのか」ということを御質問いただきました。

さっき話しながら考えていたのですが、一大学としてしなければならないことというのは、まずは、その大学にいる学生さんに対してきちんとサービスを提供する、それが基本だと思います。それに加えて、他大学と連携して、あるいは京都という地域のかかわりの中でできることということについて、一つお答えできるとすると、立命館大学における問題としては、せっかくノートテイクを養成しても、聴覚障害がある学生が毎年入ってくるとは限らないので、支援で培ったスキルを学生が卒業したら、ノートテイクが生かせなくなります。そこで、せっかく養成したノートテイクが途絶えるという問題があるので、たとえば、京都の中には、聴覚障害のある学生や児童が在籍する高校、小学校、中学校というものが何校かあります。そういうところに出て行って、自分が大学で身につけた支援の地域の中に還元していく。解決していくことというより、むしろ大学のリソースを外に出して行って、地域の活性化を図ることに学生がどんどん貢献していく、そういう展開を今後実現できたらいいなという話を、まだ話の段階ですが、しています。以上をこの質問に対する1つの回答としたいと思います。

4つ目の質問は、「コミュニケーションシートは、現在も行っていますか。シートへの三者の回答はいつ行ったのか」というものです。すでに、その学生の方は卒業したので、今は行っていません。また、シートへの三者の回答は、いつ行われましたか？ という点は、講義が終わった後2日以内にメールで回答してもらうという方法を取りました。

以上で、いただいたご質問への回答を終わらせていただきます。

【司会 吉岡】

では、今お話いただいたこと以外に発表者の方から何かございますか。では、ちょうどよい時間となりましたので、最後に本日のシンポジウムの開催にあたっては、京都市より手話通訳の方3名、パソコン要約筆記サークル「ひよこ」よりパソコン要約筆記の方5名、それからガイドヘルプの方ほか、本当に数多くのスタッフのご協力をいただきました。この場をお借りして御礼

申し上げ、シンポジウムは終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。